リード芦屋新聞

発行元
芦屋市立
あしや
市民活動
センター
リードあしや

記事
寺本空未

芦屋を襲う、大空襲

市内での戦争体験について宮本さんが語る

第二次世界大戦中に幼少期を芦屋市内で過ごした人たちが、実際に体験したことについて語るイベントが７月９日、芦屋市シルバー人材センターで開かれた。芦屋市は、５月１１日、６月５日、６月１５日、８月６日の計４回にわたり空襲を受け、焼失面積５５万９千坪という被害を受けた。１９３５年生まれの宮本允子さんは、戦争当時の悲惨な現状について強く語った。

１９４２年、国民学校に入学しました。その前年、真珠湾攻撃があり、大人たちは「日本はアメリカにも勝てる」と興奮していました。当時はまだ戦争による被害が少なかったため、ランドセルを背負い、通学していました。

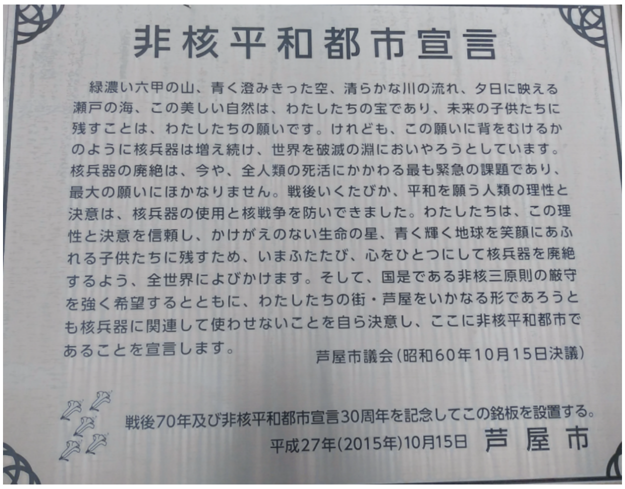
１９４４年、私が小学校３年生の時、ランドセルに代わって救急袋を持って学校に行くようになりました。そして、寝る時も靴を履くようになっていきました。救急袋の中には、防災頭巾などが入っており、より危険が迫ってきていたことがわかります。

学校へ行くと、私たち３、４年生は、山へ農作物の肥料となる落ち葉を拾いに行きました。５、６年生は、運動場を耕し、農作物を作っていました。空襲の被害を抑えるために学校を緑に塗って森のようにし、アメリカ軍にバレないようにしていました。

１９４５年ごろには戦争の危険が、国民にまで伝わるようになっていました。

家では、家庭用鍋や貴金属、ダイヤモンドなどを集めたり、「贅沢は敵」「欲しがりません勝つまでは」などのスローガンを掲げて国民同士が監視し合う状況に変化していきました。集められた金属は、何を供出したか書かれた紙と引き換えられ、私のお婆さんは、これをとても大切に保管していました。

贅沢をする人は、非国民と呼ばれ、差別されるほどでした。この時の大人たちは「最後には、神風が吹く」と言ってこの戦争に日本が負けるなんて思っていませんでした。それは、戦争の正確な情報が国民にまで伝わっていなかったことが原因だと思います。



非核平和都市宣言

緑濃い六甲の山、青く澄みきった空、清らかな川の流れ、夕日に映える瀬戸の海、この美しい自然は、わたしたちの宝であり、未来の子供たちに残すことは、わたしたちの願いです。けれども、この願いに背をむけるかのように核兵器は増え続け、世界を破滅の淵においやろうとしています。核兵器の廃絶は、今や、全人類の死活にかかわる最も緊急の課題であり、最大の願いにほかなりません。戦後いくたびか、平和を願う人類の理性と決意は、核兵器の使用と核戦争を防いできました。わたしたちは、この理性と決意を信頼し、かけがえのない生命の星、青く輝く地球を笑顔にあふれる子供たちに残すため、いまふたたび、心をひとつにして核兵器を廃絶するよう、全世界によびかけます。そして、国是である非核三原則の厳守を強く希望するとともに、わたしたちの街・芦屋をいかなる形であろうとも核兵器に関連して使わせないことを自ら決意し、ここに非核平和都市であることを宣言します。

芦屋市議会（昭和60年10月15日決議）

戦後70年及び非核平和都市宣言30周年を記念してこの銘板を設置する。

平成27年(2015年)10月15日　芦屋市

食事は炒り豆、食料不足深刻

小型爆弾の破壊力があらわに

芦屋市月若町にたくさんの小型爆弾が落とされました。小型爆弾とは、ピンボールのような大きさで、コンクリート製の壁などに当たった時に横に広がる爆弾のことで、地面に着いてから広がるので足元まで気をつけないといけませんでした。

空襲では、芦屋市の人口５割（１８０００人）の人が罹災をし、１３９人が死亡、重症者５７人、行方不明者２人の被害を受けました。他にもゴッホのひまわりの絵が焼けてしまったり、農作物がなくなってしまいました。農作物がなくなってしまったことに私のお婆さんはとても悲しんでいました。

この時食べていたのは炒り豆で、だんだんと食卓にも影響が出てきていました。燃えた家を消そうとバケツリレーをしていましたが、今思えば、あんなことで火が消えるはずがない、と大人はなぜ思わなかったのか不思議です。被害がひどくなっていく中で、どこの防空壕に入ってもいいと言われていましたが、私の友だちは、自分の家まで帰ると言ってその間に爆弾を落とされたりもしました。

「勝てるわけない」日米の格差に愕然

１９４５年８月１５日終戦が伝えられた日、私たちは「ラジオの前に集まれ」という指示が自治会から回ってきました。ラジオでは「最後の１人まで頑張れ」と言う言葉が伝えられると思っていましたが、終戦が伝えられ、私は何のことか分かりませんでした。

戦後、アメリカ軍が食べていたお弁当などを初めて食べました。その時、こんな豪華なものを食べている人たちと戦っていたのかと思い、絶対に勝てるわけがなかったと思いました。

戦後間も無く、私が中学生の時、西宮球場であったコンサートに行きました。そこでは、「戦友」という題名の曲が歌われていました。その曲は、戦友が撃たれてしまって、戦って帰ってくると、もう戦友は死んでしまっていたので、満州の石の下に埋めたという歌詞です。このコンサートに来ていた何千人もの人が泣いていました。私も中学生ながらとても感動していました。

私は、戦争への不満は、たくさんありますが、復興の速さやすごさはとても印象に残っています。この体験をもっと語り継いでいってほしいです。